
風の魔法使い

まるさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の魔法使い

【Nコード】

N7510X

【作者名】

まるさん

【あらすじ】

海鳴市に住まう少年、テンマミカセ天馬御風にはある秘密があった。

風の中にある魔力を組み替え、新たな風を、そして翼を生み出す力『マテリアルバズル魔法』。

その力を周囲に隠していた御風は、ある夜見たこともない異形に襲われるとともに、もう一つの『魔法』に出会う。

魔法と魔法がぶつかり合い、少年の否応なしの冒険が今始まる！

滅びた後のプロローグ（前書き）

初投稿です。至らぬ点は多々あるでしょうが、なるべく温かい目で見てやってください。

滅びた後のプロローグ

次元の海に無限の泡沫のごとく浮かぶ世界。

起こっては滅ぶそれらの世界は、時として様々な存在を後に残す。

それは人であったり物であったりするのだが、その中でも特に強力な力を持つ物を、次元のほんの一部に手をかけるある組織は「ロス トロギア」と呼んでいる。

ではそれが、形のない、そう「世界の記憶」とも言うべき物ならば、彼らはそれを何と呼ぶのだろうか。

一つの世界があつた。

大地と共に命が溢れ、文明と共に人が生活する、そこだけ見れば当たり前前の世界。

だが、その世界は唐突に滅びた。

全てが無に帰した今では、その世界に何が起こったのか知る者は誰もいない。

虚しく散逸していくその世界は、形ある物を一切残してはいかなかつたのだから。

ゆえに、金色の輝きに包まれた一片の羽が「世界の記憶」のひとつかきを宿し、虚空の海に消えていった事も、誰にも知られる事はなかった。

ある病院の一室は、喜びが満ちていた。

ベッドに横たわる女は、少し疲労した様子であったが幸せそうに。

その傍らにの椅子に腰掛けた男もとても嬉しそうな様子で。

両者の視線が向かう先には、男の腕の中に抱かれた、一人の赤ん坊の姿があった。

つい数時間ほど前に生まれたばかりの、二人の愛の結晶である。

「それにしても病院から連絡を受けたときはびっくりしたよ」

予定していた日よりも10日も早くの出産であったためどうなる事かと思っていた男だが、母子ともに健康との医者のお墨付きを受けて大きく安堵していた。

「当事者だった私が一番驚いたわ。でも、何となく予感はしてたの」「どうしてだい？」

苦笑しつつ言った妻の言葉に夫である男は首をかしげた。

「この子が生まれる前の日に夢を見たの」

「夢？」

「そう。眠っている私の上にね、空から金色の羽が一枚落ちて来るの。その羽が私のお腹の中に吸い込まれると同時に、とても温かくて、そして柔らかな風が吹いたの。その後眼が覚めたら何だかお腹がじんわりとしててね、ああ、これは今日あたり生まれるのかなって思った」

「ふ〜ん」

母ともなればそのような暗示的な夢も見るとか、男は感心したように頷いた。

「ねえ、あなた。この子の名前、もう決めた？」

「いや、まだだよ。もう少し先だと思ってたから、ギリギリまで考えてみるつもりだったからね」

夫の言葉に、女は少し安堵したように笑った。

「じゃあ、私がつけてもいい？あの夢を見たときから、ずっと考えてた名前があるのよ」

そう言いつつ身を起こした女の動きから察した男は、腕の中の赤ん坊を妻に渡しながら尋ねた。

「どんな名前？」

受け取った赤ん坊をあやしむながら、女は嬉しそうに答える。

「あのととき感じた温かな風。その風に祝福された子、そしてそんな風のようにやさしくなるような願いを込めて、御風^{ミカゼ}。そう名付けたいの」

「御風、御風か……。うん、いいね」

妻のつけた名前を口の中で転がしていた男は、大きく頷いて賛成の意を表した。

「よし、決まりだ。この子は御風、天馬御風だ^{テンマミカゼ}」

夫の言葉を満面の笑みと共に受け取った女は、己が胸中の赤ん坊御風の頬を指で軽くくすぐった。

「これからよろしくね、御風」

赤ん坊はその慈愛のこもった言葉に何を感じるでもなく、ただその小さな口を開けて一つ、欠伸をした。

滅びた後のプロローグ（後書き）

本編が始まる前に一つ言っておきます。

この小説内におきましては、マテパの世界は既に滅んでいるという設定になっております。

ファンの方々、申し訳ありません。

少年と翼（前書き）

随所にマテパっぽさが出ていれば幸いです。

少年と翼

遮光カーテンに遮られ、薄闇漂う部屋。

目を凝らせば、教科書や辞書の詰め込まれた勉強机や漫画の並んだ本棚といった、いかにも子供らしい有り様の内装が見える。

そんな部屋の窓際、子供サイズのベッドに一人の少年が眠っている。年の頃は9〜10歳ほど。顔立ちこそそれなりに整ってはいるものの、それ以外はごく普通の小学生といった様子の少年である。

「…ぜ。…かぜっ。…御風っ！」

どこからか自分を呼ぶ声がする。

その声に導かれるように、少年 御風^{ミカゼ}はゆっくり覚醒した。

枕元にある目覚まし時計に手を伸ばせば、そこに表示されている時刻は「午前2時」。

「…空耳…、じゃなきやお化け…」

ポーンとした声でむにゃむにゃと呟いた御風は、時計を放り出して再び夢の世界へ旅立った。

それから10分後、何者かが走り込んで来る足音と共に御風の部屋の扉がぱあんつと勢いよく開かれた。

「御風っ！いつまで寝てるの！？遅刻するわよ！」

部屋に乗り込んできたのは御風の母であった。

「御風！早く起きなきや、本当に遅刻するわよ！」

布団を引っぺがしながらの母の言葉に、御風は寝ぼけ眼を擦りながらもぞもぞと起きあがった。

「…まだ夜中の2時だよ？こんな時間に学校行く奴なんかいないよ…」

大きく欠伸をしながらのたまう御風に、母は遮光カーテンに手をかけ、それをしゃつと払った。

途端、午前2時にはあり得ない強い日の光が御風の目を焼いた。

「うおっ、まぶしっ！？」

思わぬ刺激に目を押さえる御風に、母は呆れたように嘆息した。

「いい天気ねえ。こんなお日様の出ている時間のどこが夜中の2時なのかしら？」

その言葉によくやく意識のはっきりした御風は、先程放り投げた時計ではなく携帯電話を手に取り、恐る恐るそれを開いた。

次の瞬間、驚愕と恐慌に塗れた悲鳴が御風の喉から迸った。

「いつてきますっ！」

その後、洗顔、歯磨き、朝食をわずか15分で済ませた御風は、己の通う私立聖祥大附属小学校の制服に身を包み、家を飛び出していた（因みに、件の目覚まし時計は電池切れであつたらしい）。

車に気を付けるのよー、という母の言葉を背に走る御風は、本気で焦っていた。

このままではどう頑張ってもバスの時間に間に合わない。

現在の時刻、バス停から今いる位置までの距離、己が体力、様々な条件から導き出したそれが御風の結論であつた。

これが普通の人間ならば諦めて先生に怒られる覚悟を固めるところであるが、御風にはまだ何とかできる手段があつた。

御風は不意に立ち止まると、あたりをきよるきよると見回し、人影がないことを確認した。そして、遅刻寸前だというのに人気のない路地裏にその身を滑り込ませた。

そこでも尚辺りを見回し、誰かいないかを確認する。いやに念のいっただ仕草である。

右を見て左を見て、上に視線を滑らせた時、御風は塀の上に一匹の猫がいることに気がついた。

妙に丸っこい体の、すごく緩い顔をしたその猫はこの距離まで近づいてもまだ逃げようとしない。

しばしその猫と見つめ合っていた御風だが、

「まあ、お前ならいいか…」
と、猫のことをスル　した。

猫以外に周囲に何物も居ないことを改めて確認した御風は、己の中に眠る【力】を解き放つ。

マテリアル・バズル
「魔法・エンゼルフェザー！」

その名と共に立ち上がった御風の魔力が、周囲の風を取り込み始めた。

御風の背中に巻き起こった風は、かちやかちやと何かを組み上げるような音と共にその形を変えていく。

数秒後、御風の背には光で構成されたかのような一對の白色に輝く翼が生えていた。

これが御風に秘められた力、マテリアル・バズル【魔法】、その中でも風を操り、翼を生み出す【エンゼルフェザー】である。

幼い頃から、御風の目にはいつも不思議なもの映っていた。

風の中に舞う、光の粒。自身の体から立ち上るもやのようなもの。

ある時、御風は母にこれは何なのだと尋ねたことがあった。

しかし、母はその両者共見えることはなかった。それはほかの者、父であったり、友達であったりも同様であった。

ここにきて御風は、これらの現象は自分にしか認識できないものであるということを理解した。

次に御風がしたことは、それに触れてみるということであった。だが、ただ触るだけでは光の粒ももやのようなものも空しくすり抜けるだけであった。

考えた御風は、この二つが同じようなものであると仮定して、もやをまとったまま光の粒に触れてみた。

すると、光の粒は吸い込まれるようにもやと混じり合い、かちやかちやと音を立てその姿を変えていったのである。

これに驚いた御風は手の中で形を変えるそれを近くにあった石ころに擦り付けて消そうとした。

それが功を奏したのか、手の中のそれは果たして石に移り、数秒後、その石を包み込むように羽となって顕れた。

その有様を見た瞬間、御風の中に唐突のそのの正体が浮かび上がってきた。

「マテリアル… パズル…」

マテリアル・パズル あらゆる存在に宿る【魔力】マテリアル・パワーをパズルのように分解／再構築することで別のエネルギーを作り出し、この世に新たな法則を生み出す力。これを【マテリアル・パズル】と呼び、【マテリアル・パズル】を操る者を【魔法使い】と呼ぶ。

なぜそのような知識が己の中にあるのか、当時の御風は全く疑問に思わなかった。そのことは、自分にとってごく当たり前のようになぜか思えたからである。

【魔法】マテリアル・パズルを知った御風は、最後にこの力をどうするかを考えた。

本音を言えば、両親や友達に自慢したい気持ちもあった。しかし、その当時の年齢にしては聡明（漫画や、母に読み聞かせてもらった童話などの知識）であった御風は、このような力を不用意に見せなければ、周囲に恐れられてしまうのではと思った。

大好きな両親や仲のいい友達からそんな態度を取られたらと考えただけで、御風は血の冷えるような気持ちになった。

故に御風がこの力を周りから隠し通そうという結論に至ったのは、当然の流れであった。

それでも、まあ、隠れてこっそりと練習し、力の把握に努めたりもしたのだが。

そして現在、御風は己の【魔法】を完全にものにしていて。

己の生み出した羽を二、三度羽ばたかせた御風は、その構成に何の

問題もないことを確認していた。

使い始めたばかりの頃は、十分な魔力を込められていなかったのか、羽がいきなり飛び散ったりと危ない目にもあったのである。

余談であるが、別に魔法は呪文のようにその名前を呼ぶ必要はない。ただ、御風の場合ちゃんと口に出したほうが【魔法】の構成がしっかりする気がするのでそうしているだけである。

「よし、行くぞおっ！」

気合い一発、御風は大きく跳躍すると同時に背中の羽を羽ばたかせる。ばさりばさりと音を立てる翼は、御風の体をあっという間に空へ舞いあげた。

その様子を、ただ猫だけが相変わらずの緩い顔で見送っていた。猫を後にした御風は、一直線にバス停の方角へ飛んだ。それなりに高い位置で飛んでいるせいか、誰かに見つかるようなことはない。よしんば見つかったところで、人間が飛んでいるなどと思わないであろう者ならば、大きめの鳥か何かだと勘違いしてくれるはずである。

御風は空を飛ぶのが好きだ。重力の頸木を離れて舞うこの感覚は、正に自由そのものである。

このままずっと飛んでいたい気分ではあるがそうもいかない。御風はバス停を視認すると同時にその近くにある公園に降り立った。もちろん、周囲に誰も居ないことは確認済みである。ここからならば、バス停まで歩いてほんの数分で着く。携帯電話の時刻を確認した御風は、まだ時間に余裕があることを知り、ほっと一息ついた。

しばらくのち、何食わぬ顔でバスに乗り込んだ御風は、今日は一体何をして遊ぼうか、と小学生らしい思考に没頭した。

この世界にただ一人の【魔法使い】、天馬御風の何気ない日常は、こうして今日も平和に幕を開ける。

少年と翼（後書き）

本編開幕です。

タイトルなどから分かって下さる方もいらしたでしょうが、主人公「御風」の使う【魔法】は【エンゼルフェザー】となりました。

御風少年の容姿に関してですが、ゼロクロイツのベルジを幼くしたものを想像していただけるとわかりやすいです。

次回はいよいよ御風が異世界の【魔法】と出会います。当然どこぞのフェレットと幼き白い魔王様も登場します。

【魔法】と【魔法】（前書き）

無印開始です。

【魔法】と【魔法】

夜。

一日を無事に過ごした御風は、自室の勉強机にて宿題に挑んでいた。時折悩みながらカリカリと手を進めるその姿は、風と翼を操る【魔法使い】と思えぬ、いかにも小学生らしいものであった。

「…ん？」

シャープペンシルの中身を交換しようとした御風は、筆箱の中にある芯のケースが空であることに気付いた。

「どうするかね」

別に鉛筆が無い訳でもないし、もう少しで宿題も終わる。だが、御風はこれを口実に夜の街を散歩してみたい気になった。

いつもど通りの一日の締めめに、本の少し刺激が欲しくなったのである。

思い立てば吉日。御風は上着を手にすると、母に外出と目的を告げた。

「大丈夫？もう、真っ暗よ？」

心配そうに言う母に、御風は笑って首を振る。

「大丈夫だって。コンビニはすぐそこだし、なるべく明るい場所を通って行くしね」

（それにいざとなれば【魔法】もあるし）

胸中でこっそりそう呟いた御風は、いまだ渋る母を置いて、夜の海鳴へ繰り出した。

「あじゃじゃしたー」

おぎなり極まりないバイト店員の声を背に、御風はコンビニを出た。その手の袋の中にはシャープペンシルの芯以外に、アイスの袋が3

つ（自分・父・母の分）が入っている。

「ま、こんなもんだろうねー…」

当然ながら、道中特に目立ったことはなく、御風はほんの少しがっかりした気分をため息とともに吐き出した。

市街地ならともかく、閑静な住宅街であるこのあたりには、こんな遅い時間帯を歩いているような人影は御風以外にいない。

取り残されたかのような静けさの中、御風は天を仰ぎ見ながら思い耽っていた。

当たり前の日常。

これからも続いていくであろう平和な日々。

そのことに不満はない。ただ。

「なーんか、退屈。なんだよなあ…」

退屈を吹き飛ばす非日常はココにある。しかし、それを人に晒すことはできない。

己に課した枷が蝕むジレンマは、少年にほんの少しだけ、訳もわからぬ焦燥感を与えていた。

そんなうっ屈した思いを意地悪な神が叶えてくれたのか、御風の人生を揺るがす福音の鐘が、鈍い轟音という形を取って響き渡った。

…ごおんっ…。

「…なんだ？」

静寂の元、やけに大きく聞こえたその音に御風は思わず足を止めた。（あつちには確か、動物病院ぐらいしか目立った建物は無いはずなんだが）

己の境遇に僅かな不満を抱きつつあった御風が、何かありうるであろうそちらの方向に足を向けたのは無理からぬことであった。

（行ってみよう）

そう思っつて、御風は音のした方へ歩き出した。

高町なのはは走っていた。今まで生きてきた中でも、一番頑張って走っていたかもしれない。

それはそうだろう、なのはの背後には「黒いナニカ」としか表現できないものが迫って来ているのだから。

「何！？何なの！？あの化け物！？あれは一体何なの！？」

なのはは息を切らせながら、己の腕の中にいるフェレットに尋ねた。このフェレットは、なのはが今日の夕刻に傷だらけで倒れていたの助けたものである。

その夜、なのはは突如頭の中に響いた助けを求める声に従ってこっそりと家を抜け出し、声のする方向に走って行った。

声の発信源に到着すると、そこはフェレットを預けた動物病院があった所だった。なぜ過去形なのかというと、そこに在るべき病院は廃墟と呼ぶにふさわしい瓦礫の山になっていたからだ。

「…一体何が起きているの？」

茫然と辺りを見回していたなのはは、そこに昏間助けたフェレットが倒れているのを見た。

慌ててフェレットの傍まで近づき、抱きかかえると、

「…ありがとうございます。来てくれたんだね…」

突然フェレットが話し始めた。

そのことに驚くのはだったが、追い打ちをかけるように廃墟と化した病院の壁がいきなり砕け散り、中から「黒いナニカ」が現れた。そして、今に至る。

「僕の名前はユーノ・スクライア。いきなりで申し訳ない。でも貴女には資質が有る。お願いです、力を貸して下さい！」

なのはの質問には答えず、フェレット ユーノは言葉を紡ぐ。

「し、資質って？」

「僕はある探し物の為に、ここではない世界から来たんです。でも、この探し物は僕一人の力では、想いを遂げられないかもしれない」

ユーノの真剣な口調に、なのはは足を動かしながら黙って話を聞く。「お礼はします。必ずします。ですから、僕の持っている力を、」

魔法】の力を、貴女に使って欲しいんです！」

「【魔法】？きゃあっ!？」

どかつ!。

聴き慣れぬ単語に思わず聞き返した瞬間、なのはは角を曲がってきた何者かと派手にぶつかり思いきり尻餅をついた。

「いったあゝ…」

思わず涙目になるのはだが、それでもユーノ落とさなかったのは見上げたものである。

一方、ぶつかられた方も吹き飛ばされた拍子にどこか打ったのか、その場に蹲り苦悶の声を上げていた。どうやら、自分と同じくらいの年頃の少年の様である。

「ご、ごめんなさいっ。…って、に、逃げて　!!」

少年を助け起こそうとしたその時、なのはは己の置かれていた状況を思い出し、焦燥に満ちた声を上げた。

どかつ!。

音のする方へ向かっていた御風は、角を曲がった瞬間猛然と走ってきた何者かに体当たりでわき腹を痛打されて吹き飛んだ。

「んぐおおおお…!!」

不意の衝撃に肺の中の空気は吐き出され、御風は軽い呼吸困難に見舞われながら凄まじく痛むわき腹を押さえて蹲った。

「ご、ごめんなさいっ。…って、に、逃げてー!!」

その焦りまくった声に顔を上げると、そこには何か小動物を抱えた御風と同じ年くらいの少女が立っていた。

栗色の髪をツインテールにした、なかなかの美少女である。

だが、御風はそんな少女の可愛らしい容姿を把握する前に、その背後に迫る「黒いナニカ」に目が釘付けになった。

「な、なんじゃありゃーっ!？」

どごそのジーパン刑事の真つ青な声量で叫んだ御風は、慌てて起きあがって目の前にいる少女の手を取って逃げ出した。

「うひゃあつ！？じ、自分で走ります！大丈夫ですからー！」

いきなり引つ張られて驚いたのだらう、少女はつんのめり掛けた体のバランスを取って走り始めた。

少女から手を離れた御風は、背後に迫る驚異の正体を少女に尋ねた。
「ありや、一体なんだ！？新種の生物か！？どこかの研究所から逃げ出した実験体か！？」

「そ、それを今から聞く所だったの！」

並走する少女は息も切れ切れに答えてくれた。

「聞くつて…、誰に！？」

「え、えーと、この子に…」

そう言つて少女が差し出したのは、その腕の中にいた小動物。

「は、はじめまして…」

絶句した御風の鼻先で、件の小動物が片手を挙げて挨拶してきた。

「…なんじゃそりゃーっ！？」

御風の声が再びあたりに響き渡った。

「と、とにかく！貴女の力を貸してください！」

フレレットが混乱に満ちた場を制するかのような大きな声で叫ぶ。

「そ、その【魔法】の力があれば、あれを何とかできるの？」

「【魔法】？」

御風にとつて決して無視できない単語に、思わず聞き返した。

「あんだ、【魔法】が使えるのか？」

「え、いや、その…」

思わず鋭くなつた御風の言葉に、少女は口ごもってしまった。

「この人はまだ【魔法】は使えません。僕がこれからその術を渡します」

少女を慮つてか、小動物の方が答えてきた。

（今は使えねえつてのはどういふことだ？俺の使う【魔法】とは違マテリアル・パスルうのか？）

困惑するする御風を余所に、少女と小動物の話は進んでいく。

「わかった。じゃあ私は何をすればいいの？」

「これを！」

小動物は首に掛けられていた赤いビー玉を、少女に見せるように掲げる。

「何か温かい……。これは？」

「インテリジェントデバイス。魔法を使うための杖です」

「これが……？」

杖と言われても、それはただの赤いビー玉にしか見えない。

「今は待機モードの状態なんです。ですから、貴女の力で目覚めさせて下さい」

「え、どうやって？」

そこまで着た瞬間、御風は後方の化け物が大きく跳躍するのを感じた。

「おいつ！来るぞ！！」

「えっ！？」

跳躍した化け物はそのまま御風と少女を飛び越え、その眼前に躍り出た。

「ちっ……。回り込まれたか……」

「ど、どうしよう」

苦々しく顔を歪める御風の横で、少女がおろおろとろたえている。

「おい、その小動物」

「へ？ぼ、僕ですか？」

「いや、他にいなえだろ」

御風は眼前の化け物から目を離さず、

「お前とこの子がなにかすりゃ、この化け物をどうにかできるんだな？」

「は、はい……。でも……」

そのような時間を目の前に化け物が与えてくれるだろうか？爛々と好戦的に輝く赤い両眼を見る限り、望みは薄そうだ。

「…わかった。その時間、おれが稼いでやる」
「ええっ!？」

「無茶ですっ!ただの人間があれをどうにかしようなんて!」
驚きの声を上げる少女と慌てて止める小動物。両者を尻目に、御風は己の【魔法】を開放する。

「何、心配するなよ。こっちもただの人間のつもりはねえよ」
立ち上る魔力が周囲の風を取り込み、かちやかちやと音を立てて御風の背中に集まり始める。

マテリアル・バズル
「【魔法】、エンゼルフェザー!」
高らかに紡がれる名前と共に、御風の背中に一对の光輝く翼が出現する。

「なっ!?!」
驚愕に固まる小動物。そしてその横でやはり驚きに眼を見開く少女の口から思わず言葉が漏れた。

「…天使?」
「いや、違うな」

その魂が抜けたかのような声に、御風は不敵な笑みで応えた。

「俺は、【魔法使い】だ!」

【魔法】と【魔法】（後書き）

なのはとの初邂逅の話でした。
本格的な戦闘はまた次回。

風の翼と不屈の勇氣（前書き）

御風にとって初の戦闘ですが、いろんな技を修行で開発しています。

風の翼と不屈の勇氣

ユーノ・スクライアは目の前で起こった状況に驚愕していた。成り行きで刹那の行動を共にした少年には、魔力の源である「リンカーコア」は存在していなかったはずである。

にも拘らず、少年は魔力を操り、見たこともない魔法を行使している。

（この世界独自の魔法！？それにしてもデバイスはおろかりンカーコアもいらぬ魔法なんて聞いたこともないぞ！？）

刻々と変化してゆく事態に比例するかのようになり、ユーノの混乱もその度合いを深めていった。

高町なのはは目の前の少年に目を奪われていた。

その背中に輝く純白の羽。その姿に思わずこぼれ出た言葉を不敵に笑って否定した少年は、己を【魔法使い】と嘯いた。

平凡な小学生だったはずの自分に、突如巻き起こった異常な事態。刻々と変化してゆく事態を、今現在のなのはは目を逸らさずにいることしかできなかつた。

後ろの一人と一匹が茫然としているのが御風にはわかつた。

まあ黒い怪物に続いて、偶然出会った少年の背中から羽が生えれば、そうなるのも無理はないだろう。

だが目の前の状況が状況である。いつまでも両者を呆けさせておくつもりは御風にはなかつた。

「何ポーっとしてんだ！なにかするなら早くしろ！」

御風の叱咤の声に、少女と小動物はようやく我に帰ったようである。慌てて両者が先程の続きを始めるのを尻目に、御風は怪物に向き直った。

「わりいな。少し相手して貰うぜ」

黒い怪物は、不敵な表情でそう言い放った、目の前の生意気な子供を喰りと共に睨みつけた。

しかし、当の子どもに怯えた様子はない。

その巨体に溢れる凶暴な性質を大いに刺激された怪物は、雄叫びを上げて少年に躍りかかった。

「甘い」

しかし、哀れな犠牲者を押し潰さんとしたその巨体は、御風の目の前にぎやるんっ！と巻き起こった強風の壁に遮られ届くことはなかった。

風の壁を破らんと圧力をかける怪物だが、逆のその体が巻き起こる風に押されじりじりと後退していく。

「せー、のっ！」

御風の気合いの声と共にさらに勢いを上げた旋風が、怪物の体を弾き飛ばした。

地響きを立てて落下した怪物だが、すぐに何事もなかったかのように起きあがり、牙をむき出して御風を威嚇した。

「生半可な攻撃じゃびくともしない、か」

ノーダメージな怪物の様子に、御風は眉をしかめた。

どうするかと思案する御風の目に、何やらぐつと力を込める怪物の様子が映った。

何を、と思う間もなく、次の瞬間、怪物の体から無数の触手がびゅうつと空気を切り裂き、矢のように御風に向かって迸った。

「うおおっ！？」

思わぬ反撃に、御風はとっさに背中の中を翼を羽ばたかせ、空中へ逃れた。

だが、触手はその御風を追って空へと伸びる。その姿はまるで蛇の様である。

「なめんなっ！」

御風は周囲の風を瞬時に変換、鋭利なかまいたちを生み出して触手

の群れを切り払った。

「体当たりだけが能じゃないのか」

見下ろす御風と、見上げる怪物。御風の目にはこちらを見る怪物の視線に嘲弄が混じったように感じた。

「…上等！」

御風はぴきりと額に青筋を浮かべると、己の掌に風を集め始めた。唸りを上げる豪風が、どんとと勢いよく圧縮されてゆき、やがてそれは光の球とも見紛うべき物へ変化した。

「ほらよ」

御風はその風の塊を無造作に怪物に向かって放り投げた。

勢いも何もない、見た目はただの球であるそれに何の脅威も感じなかったのか、怪物は避ける素振りもせずそれを受け、

どごんっ！！

突如発生した凄まじい負荷に、怪物はその巨体を地面にめり込ませた。

「メテリアル・バズル【魔法】エンゼルフェザー、シザンメン・トリュッケン『大圧縮球』」

ずぶりずぶりと怪物の不定形の体にめり込んでいく球を見届けていた御風は、それが完全に埋没したのを見計らい、己の魔法を解除した。

次の瞬間、

ばおおおおおおおっ！！！！！！！！！！

体内で解放された風が暴発し、怪物の体はその巨体の数倍以上に膨張した。内部で荒れ狂う風に体を破裂させまいと、怪物は必死に己の体の維持に努める。

「頑張つてんな。でも、幕だ」

御風は指をピンッと弾くとその先から先程の物とは比べるべくもない、小さなかまいたちを怪物に放った。

それが怪物の体を僅かに切り裂いた刹那、

どごおおおおおおおんっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

爆弾でも爆発したかのような轟音と共に、怪物の体は割れた風船の

ごとく散り散りに爆ぜた。

後に残ったのは、怪物の核なのか青く輝く小さな石だけである。

「（あの石、とんでもない魔力を感じる。）…って、おい、うそだろ？」

御風は己の目を疑った。驚くべきことに、粉々に散ったはずの怪物の黒い肉片が、青い石を指して集まり始めたのである。

（このまま放つて置いたら確実に復活するな。どうする？あの石をぶっ壊してみるか！？）

その時、思わぬ事態に悩む御風の背後で、桃色の光の柱が立ち上がった。

「な、何だあ！？」

驚いて振り向いた御風の目に飛び込んできたのは、自分の通う小学校の女子の制服によく似た服をまとい、長い杖を持った栗色の髪の少女であった。

それを見た御風の口から、先程の少女のように思わず言葉が漏れた。

「…魔法少女？」

「そ、そうみたいなの…」

御風の言葉を聞きつけた少女は己の姿に困惑しながらコクコクと頷いた。

怪物を少年に任せたユーノとなのはは、渡されたデバイス　レイ
ジングハートを起動させようとしていた。

「目を閉じて、心を澄ませて、僕の後に続いて唱えてください」

「あ、うん」

ユーノに促され、なのはは目を閉じる。

「我、使命を受けし者なり」

「…わ、我、使命を受けし者なり」

少しどもりながらも、なのはは答える。

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」

ドクン、と手に持つ赤い宝玉が、脈打ったかのようになのは感じた。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

唱えていると、手の中の宝玉はドンドンと熱を帯びていく。

火傷しそうな熱さを感じながらも、なのははそれを手放すことができなかつた。

何故ならば、それと同時に、手の中の熱と同種の熱が、身体の奥底から湧き上がるのを感じたからである。

「「そして、不屈の心は」」

いつの間にか、なのははユーノの言葉に追いついていた。

聞かずとも、自然と、何を言えばいいのかが分かる。抑えられぬ衝動のまま、なのはは詠唱の最後を口にした。

「「この胸に!!」」

「この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ!!」

『スタンバイ・レディ、セットアップ』

唱え終わると同時に、柔らかな女性の声が宝玉から響く。そして桃色の光が天へ向かって迸った。

その様はまるで光の柱のように見えた。

「凄い……。なんて魔力だ……」

ユーノは予想以上のなのはの魔力に驚いていた。そしてなのはは自分の様子に焦る。

「えっ!?!?こ、これ、どうすればいいの!?!?」

その言葉にユーノはハツとして、なのはに声を掛ける。

「落ち着いて下さい！ それは貴女の魔力です。落ち着いて、イメージして下さい」

「イメージって何を!?!?」

自分の身体に起こる異変のせいで、なのははもういっぱいいっぱい

であった。

「貴女の魔法を制御する、魔法の杖の姿を。そして、貴女の身を守る、強い衣服の姿を！」

「つ、強い衣服って…」

「なんでもいいんです！後で変更出来ますから！貴女が馴染みのある格好で構いませんから！」

「そんな、急に言われても…。えっと、え…と…」

その時、なのはの脳裏にいつも自分が来ている小学校の制服が浮かんだ。

「と、とりあえずこれで！」

なのはがそう言った瞬間、手の中の宝玉が輝く。

なのはの身体が光に包まれ、次の瞬間には姿が変わっていた。

所々意匠は変わっているが、白地に黒のライン、胸元の赤いリボンタイがチャームポイントの己の小学校の制服に酷似した服へと。

そして手にしていた赤い宝玉は、桜色の柄の先端に金色のパーツ、そしてそこに宝玉が納まるという長い杖へと。

「な、何なのこれ…!？」

杖 レイジングハートを手にしたなのはが、自分の姿に驚きの声を上げた瞬間、先程まで怪物と戦っていた少年がいつの間にかこちらを振り返り、なのはとばつちり目が合ってしまった。

「…魔法少女？」

ぼろりと漏れた言葉に、

「そ、そうみたいなの…」

今だ事態を把握できないなのはは、

(やっぱりそう見えるよね…)

とその部分だけ把握して頷いていた。

しばし間抜けた感じで見つめ合うのはと少年。だが、ユーノはそ

んな状況をとりあえず置いておいて、

「彼のおかげ今ジュエルシードは剥き出しの状態です。今の内に封印を！」

いまだ宙に浮かんで青く輝く石を指し、なのはを促した。

「ふ、封印！？つて、どうすればいいの！？」

「さつきみたいに、心を澄ませてください。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずですよ！」

「う、うん……」

なのはは再び目を閉じた。周囲の音が消え、心の中へ深く潜っていくような、そんな不思議な感覚をなのはは覚えた。

そして、なのはの心に言葉が浮かび上がる。

それに導かれるまま、なのはは杖を青い石に向けた。

「リリカル・マジカル！封印すべきは忌まわしき器、ジュエル・シード！」

杖の先端が桜色に輝く。

「ジュエル・シード封印！」

『シーリングモードセットアップ』

杖から現れた、幾筋もの光が青い石に絡みつく。

『スタン・バイ・レディ』

「リリカル・マジカル…ジュエル・シード・シリアル21、封印！」

『封印！』

杖から更に溢れた光がジュエルシードを包み込む。その途端、ジュエルシードから放出されていた凄まじい魔力が一気に霧散する。

「レイジングハートでジュエルシードに触れて下さい」

ユーノの声に従って、なのはレイジングハートの先端でジュエルシードに触れる。

すると、ジュエルシードは音もなくレイジングハートの宝玉部に吸い込まれていった。

『シリアルNo.21封印完了』

レイジングハートがそう告げた瞬間、なのはは元着ていた服に戻り、

レイジングハートも最初の赤い宝玉の形態に戻った。

「これで……おわったの？」

「うん……ありがとう」

ユーノが弱弱しく礼を告げる。どうやら、体力、気力的に底値にいららしい。

「それが、お前らの【魔法】か……。俺以外でそんなの見たの、生まれて初めてだぜ」

「「あ……」」

その声に、なのはとユーノはようやく少年の事を思い出した。興味深げにこちらを見る少年。

未知の魔法の使い手に、わずかな警戒心と困惑を見せるユーノ。そしてなのはは、今だ終わらぬ夜に、本の少しため息をついた。

風の翼と不屈の勇氣（後書き）

疾走感のある戦闘シーンが書きたかったのに：orz。

何かやたらと擬音の多い戦闘になってしまった。

今回御風が使った、『ツザンメン・ドリユッケン大圧縮球』はマテパのリユシカが使った『ク
リームパン』と同種の魔法です。多少の違いはありますが。

次回はようやくそれぞれが自己紹介します。

自己紹介と夢の樹の残滓（前書き）

前回、暴走体一号を少し強めに書いてみましたがどうだったでしょうか？

他のリリカルSS内ではほんの2、3行でやられてしまう彼が不憫なだけだったんです。

自己紹介と夢の樹の残滓

破壊の痕跡の残る場で見つめ合う三人。

一人は少年、天馬御風。

一人は少女、高町なのは。

そして最後のひと…、もとい、一匹、ユーノ・スクライア。

【魔法】という特殊な事情に関わる三名は、それぞれがその素性を知らぬ故、何を話してよいものかと、微妙な緊張感と気まずさを含んだ空間を形成していた。

「あの…、先程はありがとうございました」

それを破って最初に口を開いたのはユーノ・スクライアであった。

彼はその小さな頭をびよこんと下げ、御風に礼を述べてきた。

「もしあなたの助力が無ければ、こつも簡単にジユエルシードを封印する事はできなかつたはずです」

「あ、いや、それは別にいいよ。俺もやばい状況だったし。それよりもちよつと聞きたいんだけど…」

まつすぐな感謝の言葉が照れくさかったのか、少しぶつきらぼうな態度をとる御風だったが、すぐに目の前の小動物に聞きたかった事があるのを思い出し問うてみた。

「？はい、なんでしよう？」

「え…つと、その姿はフェレット、かな？何でフェレットが喋ってんだ？」

「あ、それ私も聞きたい」

それまで口を挟めなかったなのはが手を上げて自己主張した。

「あれ？あなたと会った時って、僕もうこの姿でしたか？」

ユーノはなのはを振り返り首を傾げた。

「うん、そうだよ。傷だらけで倒れてたところを、私と友達三人で助けたの」

「そういえば、あの時わざわざ病院にまで連れていつてくれて、あ

りがとうございました。おかげで、残った魔力で傷の治療に専念することができました」

今度はなのはに頭を下げるユーノ。その姿を内心でかわいい、と思いつつ、なのははいいよいよと手を振った。

「話が先に進まねえ。それより、どっかに移動しねえか？ここに長居するのはまずい気がするんだけど」

「ええ」

御風の言葉に、なのはとユーノは辺りを見回す。

怪物が暴れ回った跡、御風の魔法で傷ついたところなど、誰かに見られたら下手な言い訳ができない光景が目の前に広がっていた

「ど、どうしよう！」

「いや、逃げるしかねえだろ。俺は物を直す魔法なんて使えねえ」

そっちは？と目で促した御風に、なのはとユーノは揃って首を横に振る。

「ならとつととずらからう」

御風は二人にそう告げると、背中を向けてその場から逃げ出した。

そんな御風の背中におろしていたなのはの耳に、遠くから聞こえるパトカーや消防車等のサイレンが届いた。

「と、とりあえず、ごめんなさ〜い！」

誰に謝っているのか、なのはは少し泣きそうになりながらユーノを抱えて御風の後を追った。

その場を離れた御風達は、少し離れたところにある公園のベンチに腰をおろしていた。

息を整えていた御風は、二人が落ち着いてきた頃を見計らって、

「それで、さっきの続き何だが」

「その前に、自己紹介しない？私たち、お互いの名前も知らないんだよ？」

確かに、この中でかろうじてなのはがユーノの名前を知っているが、御風の名前は知らない。

御風も二人の名前など知らない。

ユーノも、自身は名乗った割には、なのはの名前は知らないし、当然御風の事も知らない。

「じゃあ、俺から。俺は御風、天馬御風だ」

御風が名乗るとなのはも笑顔で自己紹介する。

「私、高町なのは。なのはでいいよ」

「なら、俺も御風でいい。んで、最後が…」

御風がちろりとフェレットに目をやると、

「僕はユーノ・スクライアといいます。スクライアは部族名だから、

ユーノが名前です。それで、先程の質問なんですが…」

「あー…、それ何だが、たぶん長くなるよな？」

御風の質問に答えようとしたユーノを、御風自身が手で制した。

「あ、はい。僕の事情もそうですけど、あなたの事も聞きたいんで…」

ユーノは御風の使う【魔法】マテリアル・バズルの正体を知りたいと思っていた。

リンカーコアを用いない魔法というのは、ユーノの知的好奇心を大いに刺激するもの様であった。

「その辺の事も含めて、また後日って訳にはいかないか？家の人間にすぐ戻るって出てきてるんだ。あんまり遅くなると余計な心配をさせちまう」

御風でそういうと、なのはも恐る恐るといった様子で追従する。

「わ、私も、こっそり家を出てきているから、ばれない内に戻らなくちゃいけないの」

「じゃ、じゃあどうすれば…」

二人の言葉に困惑するユーノに、御風は軽く答えた。

「何、簡単な事だ。高町「なのは、だよ」…なのは、ユーノはお前が預かれ。そんでもって、今晚の内に詳しい話を聞いておくんだ。

それを明日俺に話してくれりゃあいい。俺の話もその時に一緒にす

る」

「明日つて、どこかで待ち合わせでもするの？」

首をかしげるなのはに、御風は鼻を鳴らして、

「何言つてんだ。あの妙な服「あ、あれはバリアジャケットと言いまして、魔導師の防護服なんです」…バリアジャケットからして、なのはも聖祥だろ？」

「う、うん。そうだけど、もしかして御風くんも聖祥なの!？」

驚き、眼をまん丸にするなのは。

「おお。俺は3年3組だ。なのはは？」

「私は3年1組!わゝ、御風くんが同じ学校だったなんて全然知らなかったよゝ」

「いや、ついさっきまで名前も知らない他人同士だったろうが」

どこか抜けた事を言うなのはに、御風は丁寧に突っ込んだ。

「まあ、そういう訳だが、ユーノは構わないか？」

置いてけぼりにされていたユーノに御風が水を向けると、ユーノは慌てたように頷いた。

「ぼ、僕は全然構いませんけど、なのはさんが…」

「なのは、でいいつてば。ウチなら大丈夫。ユーノくんも今日は疲れてるだろうし、ゆっくり休んでね」

「ここは好意に甘えておけ。それに、なのはも自分が使った魔法の事とか、ユーノに聞きたい事は俺以上にあるだろう？」

御風の言葉になのははこくりと頷いた。

魔法の事、ジュエルシードの事、レイジングハートの事等、聞いた事はいくらかでもある。

先程はゆっくり休めと言ったのだが、これら全てを説明させるとなるととてもじゃないがユーノがゆっくり等できない事にまだ気付いてなかった。

「よし、話は決まったな。じゃ、明日学校でな」

御風はそう言つて立ち上がり、その場を後にしようとした。

「あ、御風くん!」

踵を返そうとした刹那、なのはが御風の名を呼ぶ。

「ん？なんだ？」

振り返った御風の視線の先で、なのはがにっこり微笑み、

「今日は、助けてくれてありがとう！」

その笑顔にちよつと顔を赤くした御風は、それを隠すかの様に背を向けて、

「ま、気にすんな」

ひらひらと手を振ってそのまま去って行った。

その背中を、なのははしばらくの間見送っていた。

帰り道。

「しかし、これどうすつかねえ……」

情けない表情で呟いた御風の手の中で、すっかり溶けてたぶたぶとした感触を伝えるアイスの袋があった。

最後まで締まらない御風であった。

その夜、ベッドに潜り込んだ御風は強い興奮状態のせいで中々寝付けなかった。

その中で強く感じるの二つ。

（初めて、全力で魔法を使って戦った）

今まで、御風は己の力を決して周囲に漏らさないという枷を自ら嵌めていた。そのため、人目を忍んで行っていた魔法の修練もまた、派手な事が出来ずジレンマを感じていたのである。

だが、先の戦いにおいて全力で力を振るった事で、大きな充足感を得ていたのである。

（なんか、やばい人みたい。いかんいかん、自重しないと）

一歩間違えればバトルジャンキーの様な物騒な思考に陥り掛けた事を察して、御風は無理矢理その思考を払った。

(それに)

脳裏に浮かぶのは二人の姿。

喋るフェレット、ユーノ・スクライア。

種類が違うものの、自分同様魔法を使う少女、高町なのは。

(誰かに自分の【魔法】マテリアル・バズルを見せたのも、初めてだった)

人に話せぬ、見せる事も出来ぬジレンマ。

その二つが今日だけで解消されていた。

(明日、どんな話が聞けるんだろうな…)

少しわくわくしながら、御風はゆっくりと眠りに落ちて行った。

「またこの夢か」

御風は今、己の夢の世界に立っていた。

なぜその場所が夢である事が分かるのか、それは御風にもうまく説明できない。

ただ初めて見た時から、夢だ、と思ったのである。

そこは何もない真っ白な地平線が続く世界の中で、ただ一本の天まで届くような高さの樹が立っているだけの、何とも寂しい風景である。

加えて、その樹も幻のごとく儂い、霞のように揺らいだものであった。

普段ならば、この幻想的な風景にただ佇むだけで夢は終わるのだが、今日に限ってはいつもと様子が違った。

「あ…」

樹の枝の一本に、誰かが座っているのが見えた。そして、その人物がこちらを見つめているであろう事も。

「自分以外で【魔法】を使う人を観た感想はどうだい？」

おそらくは男性、自分よりも少し年上だろうか。

そのような曖昧な表現しかできないのも、その人影がやはり巨大樹同様、儂く、臃な存在だったからである。

「びっくりした。こんなにびっくりしたのは、初めて魔法を使った時以来だな」

御風は人影を初めて目にしたにもかかわらず、当たり前のように受け答えをしていた。

「そうだろうね。あんな魔法は俺たちも見た事はなかった」
人影はどうやら笑った様であった。

「なあ、あんた一体誰なんだ？俺はあんたを初めて見たはずなのに、何故か知っているような気がするんだ」

御風の問い掛けに、人影は軽く肩をすくめた。

「俺たちの事はどうだっていいさ。所詮、『終わってしまった世界』の元住人が、無様に記憶の残滓にしがみついているだけなんだから」

「何言ってるのかさっぱりわからねえ」

容赦なくバツサリ切った御風に人影は肩を震わせて笑い始めた。

「くつくつく…。いいね、元気に大きくなっているようだ」

久しぶりにあった親戚の様な言葉に、御風はますます人影の正体が分からなくなった。

「言つたら、俺たちの事なんて気にしなくていいんだ。俺たちは、君が元気に大きく育っているの見るだけで、十分なんだよ」

「はあ？」

既に御風の頭の中ははてな一色だ。

「さて、そろそろ目覚める時間だ。元気に育つんだ、俺たちの

『終わってしまった世界』の記憶のかけらを受け継ぐ、唯一の子」

「あんた、一体…」

疑問の声を上げる御風の前で、夢の世界が薄れていく。樹の上の人影もだんだんと霞んでいく。

「頑張れ、御風」

その声を最後に、御風の意識は覚醒した。

「…夢、か」

かなり遅めの就寝になったにも拘らず、御風は少しの眠気も見せず
に起き上った。

御風がああ夢を初めて見たのは、マテリアル・パスル【魔法】を初めて使った時である。
以来、ひと月に一回ぐらいの割合でああ夢を見ている。

「誰か出てきたのは初めてだな」

御風はあんなに夢い人影を思い出していた。

こうして改めて考えても、やはりあのような人物に心当たりはない。
ないはずなのだが、

「なんか、懐かしいような気がするんだよな」

あれは一体、誰なんだろう、と再び思索する御風の横で、5分遅れ
で目覚ましが鳴る。

そろそろ、学校へ行く時間である。

「ま、いいか。あの人（？）も気にしなくていいって言ってたし」

御風は頭を振って夢の事を忘れた。

さあ、気持ちを切り替えよう。今日は、彼らの話を聞けるのだから。
昨夜眠る直前に感じたわくわくを蘇らせた御風は、勢いよくベッド
から抜け出した。

自己紹介と夢の樹の残滓（後書き）

夢の樹の人物は特定しません。彼はこれからも偶に御風の夢に出てきます。

次回は状況説明編&VS犬。

信じられるかい？もう5話だったのに、まだ原作2話の真ん中ぐらいなんだぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7510x/>

風の魔法使い

2011年10月24日01時58分発行